

歴史を変えたリーダーの誰もが、
無条件に信じていたもの

「信を定める」とは、そもそも、「無条件」の行為。

「無条件に、それを信ずる」ということである。

例えば、「人生は『大いなる何か』に導かれている」と述べると、あなたは、

「その『大いなる何か』などというものは、本当に存在するのか？」

「その『大いなる何か』というものの存在は、科学的に証明されているのか？」

といった疑問を持たれるかもしれない。

しかし、科学が証明するものは「信」ではない。それは、単なる「科学的常識」にすぎない。それゆえ、我々は、「私はニュートンの法則を信じる」とは言わない。

「信」とは、

科学がそれを証明しなくとも、

誰もそれを証明しなくとも、

自分自身が、良き人生を生きるために、

その存在を信じるということ。

人生を賭して、それを信じるということ。

その無条件の覚悟を「信」と呼ぶ。

それゆえ、「信念」も「信頼」も、「信仰」も「信心」も、すべて、その無条件の覚悟の言葉に他ならない。

そして、もし我々が、この「信」を心に深く抱くならば、不思議なほど「運氣」を引き寄せる。なぜなら、我々が、無条件の覚悟としての「信」を定めるとき、心の中から「迷

い」や「不安」が消えていくからである。心の奥深くの「ネガティブな想念」が消えていくからである。

それは、そのまま「絶対肯定の想念」。

それが、「運氣」を引き寄せるのは、当然であろう。

昔から、「断じて行えば、鬼神も之を避く」という言葉があるが、心の中に「迷いが無い」とき、その行いは「良い運氣」を引き寄せ、「悪い運氣」を遠ざけるのである。

そして、我々経営者やリーダーが「自分の人生は『大いなる何か』に導かれている」と信ずるべき理由は、もう一つある。

経営者やリーダーたるもの、

この「導かれている」という「信」を持たなければ、危ういからである。

なぜなら、経営者やリーダーは、「指導者」と呼ばれる存在。

経営者は、社員を導く立場であり、

リーダーは、メンバーを導く立場の人間である。

そうした「人を導く」という立場にある人間が、

自分自身は誰からも「導かれる」ことが無いという意識は、危うい。

そこには、必ず、密やかな傲慢さが忍び込む。

そのとき、必ず、経営者やリーダーは、謙虚さを失っていく。

多くの人々を導く立場だからこそ、

社員やメンバーのかけがえの無い人生を導く立場だからこそ、

「自分自身が『大いなる何か』に導かれている」という謙虚さを持たなければ、

その経営者やリーダーは、危うい。

それゆえ、経営者やリーダーは、

「自分の人生は『大いなる何か』に導かれている」との「信」を定める必要がある。

ちなみに、この「自分の人生は『大いなる何か』に導かれている」との「信」については、歴史的研究の結果も、興味深い事実を述べている。

イタリア在住の文筆家、塩野七生氏は『ローマ人の物語』などの代表作を始めとして、特にヨーロッパ史における色々な英雄の生涯を調査・研究し、優れた著作にされているが、この塩野氏は、アレキサンダー大王やジュリアス・シーザーなど、歴史を大きく変えた人物の人生には、一つの共通点があると述べている。

それは、こうした英雄は、誰もが「自分は神に導かれている」「自分は神に護られている」と深く信じていたということである。

もとより、これは西洋の人物であるため、「神」という言葉になるが、東洋の人物の言葉で言えば「自分は天に導かれている」「自分は天に護られている」と信じていたということであろう。

すなわち、洋の東西を問わず、その人生の絶頂期に、運気を引き寄せ、歴史を変えるほどの仕事を成し遂げた人物は、誰もが、「自分は『大いなる何か』に導かれている」「自分は『大いなる何か』に護られている」と信じていたのである。

このこともまた、経営者やリーダーにとって、

第三の心得 人生は「大いなる何か」に導かれているとの「信」を定める

ということが、「絶対肯定の想念」を持ち、運気を引き寄せるために極めて重要な心得であることを教えてくれる。